平成二十七年三月吉日初版作成

真の言霊を発し、　宇宙の法則に乗る

高嶋　善三郎

目　次

宇宙神の二つの現われ・・・・・・・・・・・・・・・・３
法則の神と守護神としての神・・・・・・・・・・・・４
大宇宙神と宇宙神・・・・・・・・・・・・・・・・・６
宇宙神の根源に直結した私たちの魂・・・・・・・・・７
覚知する心と分別する心・・・・・・・・・・・・・・７
如来を慕ひ、自己の本心に呼かける・・・・・・・・・８
真の愛とは他に光を与えること・・・・・・・・・・・９
心が自由自在となる・・・・・・・・・・・・・・・１０
肉体人間の頭脳でとやかく想いをめぐらさない・・・１１
過去に放った想念に翻弄されない・・・・・・・・・１２
真の言霊を発し、宇宙の法則に乗る・・・・・・・・１３

お願い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構ですので、お聞かせください。

次の連絡先にお願い致します。

（スマフォ）０９０３３４６６６１９
（アドレス）zensan@peach.ocn.ne.jp

宇宙神の二つの現われ

宇宙神という存在について、あまりにも高い波動で、我々人間は近寄りがたい存在ではないかという疑問を持たれた方から、宇宙神の存在について、質問がありました。

そこで、この疑問に対する答えをさぐっていきたいと思います。これに参考となる五井先生のお言葉があります。

「宇宙神の一つの現われは法則としての神である。無念、無相、無情、ただ大生命として無限なる流れである。その流れの一つ一つとして人間の小生命がある。その小生命となった時、はじめて、幽質ができ、普通物質と呼ばれる肉体ができたのである。そして、その小生命が幽魂となり、肉体として個々に分かれたという意識によって、自己を守る本能が生じ、欲望が生じ、業生の世界になってきたのである。このままで法則のまま放置しておけば、この世界は業生の渦の中についには消滅し去ることは必然なのである。それは、この世界を、まともに見つめ得る人の誰もが思い至るところなのである。**法則である神は、無念であり、無相であり、無情である。**法則に情があれば法則でなくなる。無念であり、無情であるものが人類を救おうと思うわけがない。まいた種はまいた種そのままの実がなる。それが法則である。怨みは怨みとなってかえり、怒りは怒りとなってかえり、悲しみとなってかえる。これが法則である。この法則だけで人類が救えるわけがない。ここに無神論の生れてくる理論が成り立つ。こんな法則の神だけで成り立っていたのでは、人類世界は唯物論の世界となり、力と力が勝負をきめ、地球の破滅は時間の問題となってくる。

『神は愛である』という神は法則の神ではなく、守護神としての神である。宇宙に満ち満ちている生命という神ではなく、人間と等しき愛念をもつ神である。

このニつの神の現われを一つと誤解したところに理論的宗教がもつ現実的矛盾がでてくるのである。

法則としての神にいくら頼みごとをしても聞き入れてくれるはずはない。法則は絶対に曲がらぬからである。法則のとおりに自分の心を自分で乗せてゆかなければ、けっして救われることはない。ところが、ひとたび法則をはずれた歩みに入った人が、自分だけでまたもとの法則の上に自分を還すことはほとんどでき得ないと思われるほどの難事である。これでは神の必要もなければ、宗教の必要もなくなってくる。

そこにつけ入ってくるのが、低級なる現世利益のみの宗教である。そうした宗教では、その人の真の利益、魂の浄まりは、まるで無視して、ただ単なる目先の現世利益だけを得させる。それによって後にその人の魂がどのように苦しみ損ずるかは問題の外なのである。しかしすがってゆく人間にとってはその場の苦しみだけを問題にしているのだから、その場がとにかくすごせれば、ありがたいご利益となるわけである。これが邪教のはんらんとなってゆく。この原因は、正しいと称される宗教が、前にいったよう

な誤りを意識せぬ理論的宗教論になっているからで、いかにその理論がただしそうに見えていても、その底に愛情を感じさせぬような法則論の宗教では、たとえ邪教であっても現世利益の多いほうに民衆はついてゆく。

　私は二つの宗教の流れを今日の宗教界にみていたので、正しい宗教論の上に守護神という愛なる神の人類救済的指導力をおいたのである。（『天と地をつなぐ者』１７４ページ）

法則の神と守護神としての神

五井先生は、宇宙神には、法則の神としての神即ち宇宙に満ち満ちている生命という神と、守護神としての神即ち人間と等しき愛念をもつ神という二つの現われがあり、この二つの神の現われを一つ即ち法則の神としての現われと誤解したところに理論的宗教がもつ現実的矛盾がでてくると解説されています。

　法則としての神にいくら頼みごとをしても聞き入れくれるはずはない。法則は絶対に曲がらぬからである。法則のとおりに自分の心を自分で乗せてゆかなければ、けっして救われることはない。ところが、ひとたび法則をはずれた歩みに入った人が、自分だけでまたもとの法則の上に自分を還すことはほとんどでき得ないと思われるほどの難事である。これでは神の必要もなければ、宗教の必要もなくなってくる。そこにつけ入ってくるのが、低級なる現世利益のみの宗教である。そうした宗教では、その人の真の利益、魂の浄まりは、まるで無視して、ただ単なる目先の現世利益だけを得させる。それによって後にその人の魂がどのように苦しみ損ずるかは問題の外なのである。しかしすがってゆく人間にとってはその場の苦しみだけを問題にしているのだから、その場がとにかくすごせれば、ありがたいご利益となるわけである。これが邪教の反乱となってゆく。

　この原因は、正しいと称される宗教が、前にいったような誤りを意識せぬ理論的宗教論になっているからで、いかにその理論が正しそうに見えていても、その底に愛情を感じさせぬような法則論の宗教では、たとえ邪教であっても現世利益の多いほうに民衆はついてゆく。

　そこで五井先生は二つの宗教の流れを今日の宗教界にみていたので、正しい宗教論の上に守護神という愛なる神の人類救済的指導力をおいたのであると言われています。

五井先生の著書『神と人間』では、守護神について次のように説明されています。

「この時、神(直霊)はこれを知って、分霊の救いのために新たなる光を放射した。これを守護神と呼ぶ。この守護神の光によって、最初に幽界、肉体界を作った分霊は救われ、各子孫の守護の任についた。これを守護霊（支配霊・コントロールともいう）と呼んだ。この守護霊のなかには正守護霊と副守護霊とが定められた。守護神は常に多くの守護霊の上にあって、守護霊に力を添えていった。各正守護霊はしだいに一人の肉体人間に専属し、その主運を指導してゆくようになり、副守護霊は、しだいに、仕事につい

ての指導してゆくようになり、副守護霊は、おおむね、仕事についての指導を受け持つようになっていった。直感とか、インスピレーションとかいうのは、これら守護霊からくる指導の念である。これは、普通は自然的行動のように行われ、何気なくある家を尋ねたら、よいことがあった、とか、ふと左に歩みを運んだとたんに車がすれ違って、危うく難を除かれた、というように日常茶飯事の何気ない行為として守護している場合が多い。

このような組織状態が現代まで続いているのである。人間とは一般の人びとが思っているような肉体だけのものではなく、このように複雑な組織をもつ者なのである。『神と人間』２８ページ）

「かかる過程にあって苦悩している分霊を救い、肉体界を浄め、宇宙神の意志そのものの世界とすることが、直霊の最初からの計画であった。そこで、各直霊は自己の光を分けて、分霊たちの守護神となし、守護神は、最初に肉体界の創造にあたった分霊たちを、業因縁の波から救いあげた。この分霊たちは、守護霊となり、守護神に従って、ひきつづき肉体界に働く後輩の分霊たち、いわゆる、子孫の守護にあたることになった。そして分霊の経験の古いものから、順次に守護霊となり、ついには各人に、必ず一人以上の守護霊がつくまでになって、今日に及んでいる。『神と人間』３４ページ）」

「この時」とは、分霊が肉体の因縁の中に閉じこめられ、各分霊だけの力でこの因縁を越えることがほぼ不可能に近い状態であり、いよいよ業因を深めてゆき、この業因の隙間から神の光が差し込まぬ以上、人間は本来の神性に目覚め得ぬような事態になった時と説明されています。

何故そのようになったかというと、一度発した念は必ず、その出発点に還る法則となっていて、この発した念即ち業因は還って果となり、因果の波は時を経るにつれてしだいにその層を厚くし、分霊の肉体我を牢固としてぬくべからざるものとしていったからである。肉体我は粗い波動の波が起こしている自我であり、肉体という物質によって、自己と他とを区別しているものであって、まず各自が己を守ろうとする意識を起こすため、どうしてもお互いの利に反することが起こると、その利を守るために争わざるを得なくなる。ましてこの分霊が陰陽に分裂して男女となり、肉体人口が増えるにつれて、肉体我は自己と自己の一族のみを守ろうとし、そのようになったと言われています。

かかる過程にあって**苦悩している分霊を救い、肉体界を浄め、宇宙神の意志そのものの世界とすることが、直霊の最初からの計画であった。**そこで、各直霊は自己の光を分けて、分霊たちの守護神となし、守護神は、最初に肉体界の創造にあたった分霊たちを、業因縁の波から救いあげた。この分霊たちは、守護霊となり、守護神に従って、ひきつづき肉体界に働く後輩の分霊たち、いわゆる、子孫の守護にあたることになった。そして分霊の経験の古いものから、順次に守護霊となり、ついには各人に、必ず一人以上の守護霊がつくまでになって、今日に及んでいる。この守護霊（支配霊・コントロールともいう）のなかには正守護霊と副守護霊とが定められた。

守護神は常に多くの守護霊の上にあって、守護霊に力を添えていった。

各正守護霊はしだいに一人の肉体人間の専属し、その主運を指導してゆくようになり、副守護霊は、しだいに、仕事についての指導してゆくようになり、副守護霊は、おおむね、仕事についての指導を受け持つようになっていった。直感とか、インスピレーションとかいうのは、これら守護霊からくる指導の念である。これは、普通は自然的行動のように行われ、何気なくある家を尋ねたら、よいことがあった、とか、ふと左に歩みを運んだとたんに車がすれ違って、危うく難を除かれた、というように日常茶飯事の何気ない行為として守護している場合が多いと説明されています。

守護神守護霊は、人間が宇宙の法則に乗れるように、人間の霊性の開発状況にあわせて守護し、導いて下さる存在であるといえます。

大宇宙神と宇宙神

そして、この地球人類の守護神を助ける神が存在する。その存在とは、これまで宇宙の星々の完成の助けをしてきた宇宙の神々であり、宇宙神と五井先生は呼ばれています。そして絶対神即ち法則としての神を大宇宙神と『宇宙の神々と宇宙人』（五井先生のご法話テープ）で説明されています。

その守護神を助ける存在について、『老子講義』には、次のように説明されています。

「今日では、宇宙の運行が、地球の位置を宇宙神のみ心の中心に一段と高めあげてくれるように運行されてきている。そうした運行のもとでは、今日まで地球上の強い勢力となっていた、悪のような姿、私のいう業想念波動が、急速に消されてゆく。そして、宇宙神のみ心に合致した正しい心的波動をもった人々や集団が、非常に働き易い立場に浮かび上がる状態に自然になってくる。

その一つの働きかけが、宇宙人、宇宙天使の地球への援助の手となって現われてきている。この世はすべて波動の世界である。宇宙法則から外れた波動をすべて宇宙法則の軌道に乗りかえる運動が今こそ活発に行われることになるのである。」（『老子講義』55ページ）

現在宇宙の運行が、地球の位置を宇宙神のみ心の中心に一段と高めあげてくれるように運行されてきている。つまり地球の次元上昇の時を迎えている。そして悪のような姿、私のいう業想念波動が、急速に消されてゆく。そして、宇宙神のみ心に合致した正しい心的波動をもった人々や集団が、非常に働き易い立場に浮かび上がる状態に自然になってくる。その一つの働きかけが、宇宙人、宇宙天使の地球への援助の手となって現われてきている。

五井先生のご法話のテープで話されている「宇宙の星々の完成を助けてきた宇宙の神々」即ち「宇宙神」はここでは「宇宙人、宇宙天使」として表現されています。

こうしてみると、最初五井先生が説明された、宇宙神の守護神としての神は、地球人類を守護する守護神や、宇宙の星々の完成を助ける神々

であることがわかります。

宇宙神の根源に直結した私たちの魂

私は、五井先生のみ教えを行じて、約５０年近くなります。入信した当時、宇宙神は私たちにとってあまりにも波動が高い存在であり、まず守護霊守護神を想いつづけなさいと言われたものです。

それが今では、守護霊守護神と同じような存在としてとても近い存在としてあるように思います。

これは、昌美先生の指導のもと、毎月究極の光を降ろす行事を長年続けてきたことによるといえます。

『白光誌』２００８年４月号では、昌美先生は、宇宙神の光に直結している、白光会員の先輩方が創り上げた大光明の共磁場を通して、究極の真理である「我即神也」「人類即神也」の意識をもとに光明思想を唱えつづけ、究極の光を降ろし続けてきた結果、驚異的なエネルギーが新たに宇宙神より注がれ、その共磁場は乗数的に偉力を発揮しつづけてきたと言われています。

『白光誌』２０１２年５月号では、私たち神人は宇宙神と合体する寸前まできていると言われています。

「　そしてすでに神人は、宇宙神と合体する寸前まできているのである。そのため、ついに宇宙神や五井先生の地球人類救済のための大プロジェクト、大計画に組み入れられ、いよいよ始まる今年の大難を光に変容し、限りなく小難にし、さらにはゼロにするために祈りの言霊をみずからに、そして人類のために発し続けるのである。

地球人類は必ず救済され、大成就となる。その前に神人としてのリーダーのリーダーのリーダーは、その大任を果たすミッションを遂げるために、宇宙神、五井先生より、すべては完璧、欠けたるものなしの環境、状況、状態に調えられてゆくのである。

ゆめゆめ疑うことなかれ。心より確信し、人類のために捧げてください。大成功　大成就（『白光誌』２０１２年５月１６ページ）

さらに２０１２年と２０１３年の７月のご神事を通じて、私たちは「すべては完璧、欠けたるものなし、大成就」の真の言霊を昌美先生のご指導のもと天に刻印することに成功することができたのです。

そしてついに、２０１４年、新年祝賀祭において、私たちは「宇宙神の根源に汝らの魂は直結した。」という五井先生のメッセージを、昌美先生を通していただいたのです。

私たちは、「宇宙神や五井先生の地球人類救済のための大プロジェクト、大計画に組み入れられ、いよいよ始まる大難を光に変容し、限りなく小難にし、さらにはゼロにするために祈りの言霊をみずからに、そして人類のために発し続ける大任を果たすミッションを遂げるために、すべては完璧、欠けたるものなしの環境、状況、状態に調えられてきている。」その実感は、ますます強くなってくることでしょう。

覚知する心と分別する心

ある方から次のような質問がありました。

自分は、失敗した体験が頭によぎり、頭から離すことができません。お浄めしてもらったり、みんなで一緒に祈ったときは、忘れることはありますが、またその失敗した体験の想いがよみがえってきます。**これをどのように解決していったら、よいのでしょうか。**

この質問は、祈り始めた方に多いものですが、長い間祈っていても、時々頭をよぎり、その体験をして起こった感情即ち恐怖や不安が襲ってくるという方もおられます。

これは、何故そのような想いが起こるのか、神はどのようにして私たちを守護しているのか、その仕組みをはっきり理解することによって、その想いを放つヒントを得ることができるのではないでしょうか。

この質問に参考になる五井先生のお言葉があります。それは『釈迦とその弟子』で、阿難が外道の呪縛によって女戒を破りそうになった時、世尊（釈尊）の仏力と文殊菩薩の霊力による強い浄めによって救われた後、世尊（釈尊）から女戒を破りそうになった心は何かと問われ、自分の考えを答え、最後に世尊から真理を悟らされるくだりの部分です。

「阿難よ、その答えも真実ではない、覚知する心と分別する心とは一つのものではない。覚知する心とは本心であり、分別したり認識したりする心は因縁性の想念である。直覚し、知覚するのは無死無生の心、空の底にある無限の心と等しき心、仏と一つの心であり、眼で見、耳で聞き、想いで分別し、認識しようとする心、善悪を判断しようとする心等等は、すべて仏の心、自然（じねん）の心に反する業因縁の想念の心である。」（『釈迦とその弟子』１２ページ）

阿難が外道の呪縛によって女戒を破りそうになったのは、本心と業想念を区別できなかったことだと、世尊はやさしく諭されています。

覚知する心は本心であり、分別する心は業想念即ち、認識をする心で因縁性の想念と説明され、前者は無死無生の心、空の底にある無限の心と等しき心であり、仏と一つの心であり、後者は眼で見、耳で聞き、想いで分別し、認識しようとする心、善悪を判断しようとする心と解説されています。

この覚知する心は、祈りを始めた方にとっては、わかったようで、わからない心なのです。それは、人間はもともと持っている心なのですが、肉体生活を長年送る内に、忘れてしまったからです。即ちこの肉体生活において眼で見、耳で聞き、想いで分別し、認識し、善悪を判断して生きてきたからです。

如来を慕ひ、自己の本心に呼かける

世尊はどのように、阿難を導かれたかをみてみましょう。

「・・・昨日迄の出来事は、すべておまへの無明のなせるわざ。業の一つの集積が表面に愛欲行となって現われ、そして如来の光明によって消え去っていっただけである。けっしておまへの本心

が傷ついたわけでもなければ、おまへ自体が駄目であった、というわけでもない。おまへの本心は、依然汚れず痛まず、真玉の如く輝き渡っているのである。おまへはその真理を知って、今日限り消え去った業を追いかけてはならぬ。想い起こせば、その想念がそのまま無明となり、またおまへの意識を曇らせてゆくであろう。もしそうした時には強く如来を慕ひ、如来と倶なる自己の本心に呼びかけねばらぬ。」

世尊は、阿難の行いを責めるのではなく、その行いがどのようにして起こってきたのかを説明されています。阿難が真理を知らなかったことがすべてである。業の一つの集積が表面に愛欲行となって現われ、そして如来の光明によって消え去っていったのであって、阿難の本心が傷ついたわけではないし、阿難自体が駄目であったわけでもない。

そしてどうすべきかを示されています。

阿難の本心は、依然汚れず痛まず、真玉の如く輝き渡っている。**その真理を知って、今日限り消え去った業を追いかけてはならぬ。想い起こせば、その想念がそのまま無明となり、また阿難の意識を曇らせてゆくであろう。**もしそうした時には強く如来を慕ひ、如来と倶なる自己の本心に呼びかけなさいと言われているのです。

真の愛とは他に光を与えること

『人間と真実の生き方』を行じ、祈りを重ねてゆくうちに、なにを習得していくかを知ることは、自分の失敗や不安や恐怖を乗り越えてゆく上において、大変参考になるのではないでしょうか。

結論から言えば、本心と業想念が区別できるようになり、真の愛がどういうものかが実感として理解できるようになるということでしょう。

『愛・平和・祈り』で五井先生がそのことについて言及されています。

その概要は次の通りです。

この地上界には神界の愛という心がそのまま現われていない。どのように現われているのか。愛は執着の想いを伴いやすく、愛の心の流れが、把われの想いで、一つところ、一つ想いに止まってしまい、愛することが苦しみとなり、愛されることが重荷となり、神のみ心を離れた、神のみ心の中にはない、消えてゆく姿的な業想念波を巻き起こして、そこに不幸や悲劇が生まれていると言われているのです。

これは、**普通、愛と簡単にいわれているものは、ほとんどが、業想念（因縁）と業想念との融合によって行われるか、業想念の自我欲望の満足を愛と想い違えているからである。つまり執着、執愛、自分の生命を縛り、他の生命を自我欲望のために縛りつけてしまっているからである。**

別な言葉で云えば、純粋なる愛（神）の行為が、直接その光のままに行為される時には、肉体人間にとって、あまりにもその光が強すぎ、峻厳すぎるのを、適当に薄め弱めてこの地上界の肉体人間に適合するようにしてゆく心が情であるが、この地上肉体界は現在では、神の心と業想念の二つが入り交じって出来上がっている世界なので、情という心は、愛（神）の面と、業想念（執着）の面との、どちらにも働きかけてゆく

ので、うっかりすると、愛情だと思っている行為が、いつの間にか、業想念という執着の方に流れていっている場合があるからである。

このようになってしまうのは、愛する、ということが、光を他に与えることである、という神のみ心、つまり原則を知らないから起こっている。また、愛されたいのに愛されないのは、自分が相手を愛さないからだということを、その人は頭で知っているかもしれないが、心ではわからないからであると五井先生は解説されているのです。

さらに真の愛を行ずるには、本心と業想念の区別をはっきりつけることが必要である。これは、日頃より訓練をしていないと、できない。それは、消えてゆく姿という真理を知らないと、真愛と執愛の区別がつき難いし、これは執愛だと思いながらも、その執愛の想念の波から逃れることができないからである。

この見分け方の一番簡単な方法は、自分の想念をいつでも神様におかえししておくことなのである。自分の心にどのような感情想念が出てこようと、それが愛のように思えようと、情のように思えようと、守護の神霊を通して、自分の本心、つまり神のみ心にその想念を一度戻してしまう、言い換えれば、神にすべての想念を任せることが必要で、その方法が世界平和の祈りであると、五井先生は言われているのです。

そして、愛深い人が情（執着）に溺れぬように自重してゆく姿には、美があるもので、そうした人の動きの中に、神のこの現象界における生き方が示されているものと思われると付け加えられているのです。

心が自由自在となる

この業想念が浄められるに従って、守護霊守護神とひとつになり、守護神が自分の中に一つに入ってしまう。そして直霊、宇宙神とパッと一つにつながってしまうと五井先生は言われています。

『老子講義』第九講（弊るれば則ち新たなり）では、老子の言葉を通して、「宇宙神のみ心と一つになると、心が自由自在となる」と説明されています。その箇所をみてみましょう。

> 「宇宙神のみ心と一つになっていると、自己を、自意識で世間に現わそうという必要もない。自己主張をすることもない。聖人は宇宙神のみ心と一つになっているので、自然法爾、そのまま生きていることによって、自己の天命が自ら行われてゆく。そういう心境になっていると、すべての事柄が鏡にうつるように明らかになってくる。ゆえに殊更に、自ら是と思う自己是認することの必要もなければ、自己を誇ることもない。そうすると、ますます、功を積んでゆくことになり、人と争うことも無い。そういう聖人にみんなが成れば、天下に争いは起こらない。」（『老子講義』８６ページ）

宇宙神と一つになると、自然法爾、そのまま生きていることによって、自己の天命が自ら行われてゆくことになると言われています。この生き方は老子の「無為にして為す」という生き方です。

五井先生は、『老子講義』第二講、第三十四講において分別する心と比較しながら覚知する心の生き方を老子の「無為にして為す」生き方を

通して、解説されています。

老子の生き方は、消極とか積極だとかいう、そういう境界をすっかり超越し切った、空の空の又その奥の空のというような、大生命の根源からこの世に働きかけていた生き方である。

説くこと為すこと、老子のすべては、自然法爾に、ひとりでは、これをしようと考えてからするのでも、これはしまい、と思ってしないのでもなく、老子の一挙手一投足、一言一句が、光となって、対する人に放射され、万物の上に投げかけられるのである。大生命がそのまま躍動している。

こうして、ああして、等いうのは、この世の一般の人々の在り方であり、聖人の行為というものは、自己の肉体身の頭脳で兎や角考えて行うのではなく、神霊の界で定まったことが、瞬時にして、肉体身を通して行われてゆくのである。これを無為にして為すというのである。

老子にかぎらず、古来の聖賢というものは、殆どが、頭脳知識に頼ったり、こちょこちょ頭をひねって考え考え行為するような態度を否定しているのである。

どうしてそういうことになるのか。それは老子の云うように、**肉体頭脳の小智才覚では、この相対界の苦の境界を人類が抜け出ることができないから**である。

凡夫は当然のように、この肉体をもった人間を唯一無二の人間だと想っている。しかし聖人は、人間とは生命そのものであって、肉体は一つの生命の道具であり、生命の現われる一つの場所であることを知っている。それは頭で知っているのではなく、事実として承知している。そして、自己という一つの生命の流れは、奥深いところから、浅い狭いところまで、無限の段階において働きつづけているのであることも知っている。であるから浅い狭い肉体頭脳という場所だけを経巡っているような想念や知識をいくら振り廻していても、大宇宙の法則に乗り切ることはできない、大宇宙の法則に乗って生きてゆかなければ、この狭い肉体世界での生き方さえ正しく行じてゆけない、と自らの体験で昔からの聖者たちは知っていた。そこで、老子は無為と説き、釈尊は空と説き、イエスは神のみ心のごとく、といって全託を説いていたのであると言われています。

肉体人間の頭脳でとやかく想いをめぐらさない

『老子講義』第二十七講では、「無為にして為す」の思想の根本を解説されています。

無為を為しと云う言葉の意味は、為（ため）にしないということ。何をしよう、かにをしよう、というように、肉体人間の頭脳でとやかく想いをめぐらさないこと。凡夫と聖者の違いであり、道に乗った人と外れた人との相違である。

道や徳は、万物を生成発育させて下さっているのだから、道を尊び徳を貴ばざるものはいない。誰も彼も、何事もすべて、道や徳の力に尊貴の念をもっている。どうして、道がそのように貴いのかというと、道でも徳でも、誰に命ぜられたからといって、その行為をしているのではなく、命ずる何者もないのに、自らが自然に、万物を成長させていること

が、その尊貴に値するところなのである、というのである。命ぜられたからする。なんの理由があるからする、というのでは、その理由があることによって、その尊貴さはマイナスされてしまう。ということがその裏の言葉にあるわけである。ここのところが、老子の無為の思想の根本のところである。

　自己の為したことについて、なんらかの報いを期待したら、それが金銭的なことでなく、相手の喜びをさえ期待したら、その人の愛行為は、無為でなくなるのである。無為から生じた行為でない場合には、必ずといっていいほど、その人は期待はずれの結果を、いつかは受けてしまう。その反対に自分がいつしたのかすっかり忘れ果てていたような愛行為が、相手にとって終生の喜びとして、心を温めている、というようなことが、よくあるものであると解説されています。

過去に放った想念に翻弄されない

　心から失敗した体験の想いなど苦悩の想いを離すには、どうすべきか。昌美先生が私たちに示されたのが、**過去に放った想念に翻弄されない、思った通りに実現される世界として提唱されているのが果因説の生き方と言えます。**

　拙書『すべてが成就する世界を現わす』で言及しておりますが、あらためてその内容のポイントをみてみましょう。

果因説は過去の因果で未来はきまらないという真理によるもので、過去にこだわる必要がない。自分の現在も未来も、自分の自由意志と創造力によって、いかようにも創り出してゆくことが出来る。切り開いてゆくことが可能で、また、変えることも自由に行えるのである。

　過去が現在に影響を与えているという潜在意識を取り除くために、時間は過去から未来へ流れてゆくのではなく、未来から現在、過去へと流れてゆくのであると説かれています。今この瞬間未来について思ったこと、考えたことの『成就』は、いずれ現在にやってくるのである。そして今現在、この瞬間、同じことを観念でやるのではなく、意識をもって繰り返しインプットすることにより、時間はどんどん未来から現在、過去へと流れてゆくのだと解説されています。

　問題を解決するためには、過去に遡り、失敗や不幸の原因を探り出すのではなく、まさに今の瞬間、自分の未来に関する希望や出来事、そして輝かしい人生の設計図を強く思い、“成就”“必ずなる”“絶対大丈夫”“すべては可能”“すべては完璧”“すべては大調和”・・・など光明の言葉を心の中に、魂の中に強くインプットすることであり、それによって自らの人生の未来に刻まれたことになり、それが現在に流れてくるとされたのです。**過去に遡り、失敗や不幸の原因を探り出すことは、そこに莫大なる時間とエネルギーを割き、その上突き止めた原因により、新たに否定的感情想念を引き起こしてゆき、因縁因果の循環から抜け出すことができない**のだと言われているのです。

別の言い方をすれば、人間は神の子であり、本来完全性であって、こ

の世の因縁因果の波、悪や不幸や病気等々悪想念は、過去の誤った想念行為の消えてゆく姿である、という真理の言葉を肯定し、その業想念を常に消し去ってくれている守護の神霊への感謝行をつづけてゆくという五井先生が示された方法を継承しつつ、過去の誤った想念行為の消えてゆく姿への把われを出来得る限り最小にするため、自分の未来に関する希望や出来事、そして輝かしい人生の設計図を強く思い"成就""必ずなる""絶対大丈夫""すべては可能""すべては完璧""すべては大調和"・・・など光明の言葉を心の中に、魂の中に強くインプットする。即ち**有限なる物質世界に焦点を合わせてゆくのではなく、すでに心の中にある、無限なるものに心をあわせてゆくことにより自分を生かし、相手を生かし、愛と調和と美の世界をこの肉体界に現わす即ちすべてが成就する世界を現わすことを提唱されています。**

ここで、消えてゆく姿という真理についてあらためて見ましょう。

消えてゆく姿という真理について、五井先生は、『老子講義』第九講（弊るれば則ち新たなり）で次のように説明されています。

病気や不幸や、国と国との間では戦争などという、弊れる状態は、私たちの古い自己の習慣性、古い事物への把われの想念波動が、消されてゆく姿として起こっている。これは、常に自己なり、人類なりを高め深めて、真実の神の子と成し、神の世と成すための、神のみ心としての新陳代謝の原理なのである。宇宙子科学的に言えば、この地球世界も精神と物質の調和によって成り立っているが、この精神と物質はそれぞれの宇宙子（波動）によって構成されており、常に新陳代謝していて、瞬々刻々古いものと新しいものとが代ってゆくのである。**この原理を知らないで、いつまでも古い自己や事物に把われていると、その古い自己なり事物なりを消し去る為に、新しい宇宙子が次々と宇宙心から送りこまれてきて、嫌でも応でも、新陳代謝させられてゆくのである。**

真の言霊を発し、宇宙の法則に乗る

失敗の体験が頭から離れない方の多くは、何故こうなったのかなどの原因究明するあまり、失敗の体験の中に想いを突っ込んでいるのではないでしょうか。失敗内容をいくら分析しても、因縁因果の循環から抜け出すことはできない。今まで見てきました五井先生、昌美先生のお言葉から整理できますように、原因究明は「自分は宇宙の法則、真理を知らなかった」ということだけで十分だと分かります。「自分の業想念を浄めていただいたのだ。これですべては完璧、欠けたるものなし、大成就」と守護霊守護神へ感謝し、真の言霊を発するだけで、即ち自己の本心を想い起こすという反省で足りると言っておられるのではないでしょうか。何故なら失敗を引き起こした業想念が消され、宇宙の法則に乗ったのであり、もう同じ失敗はするはずはないのですから。

このような苦しみの因縁因果の循環から抜け出した体験は、本書7ページにありますように、「いよいよ始まる大難を光に変容し、限りなく小難にし、さらにはゼロにするために祈りの言霊をみずからに、そして人類のために発し続ける」**大任を果たす原動力となる**ことでしょう。